

“Light” House

かつて灯台には「灯台守」がいた。

彼らは日々灯台に灯りを燈し、船舶と交信することで、航海を手助けしていた。また単なる道標の光にとどまらず、

その灯火は船乗りと灯台守との無言の対話であった。

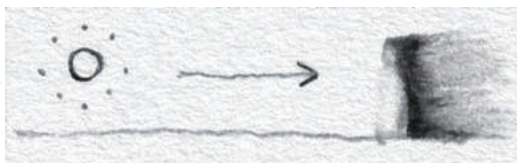
しかし現在、灯台に灯台守はいない。無人化された灯台は、無機質な光を機械的に発している。

船乗りが灯台の光をみて、灯台守を想うこともなくなった。

本提案では、有人灯台として機能する、全盲者のための住宅を提案する。

-1-

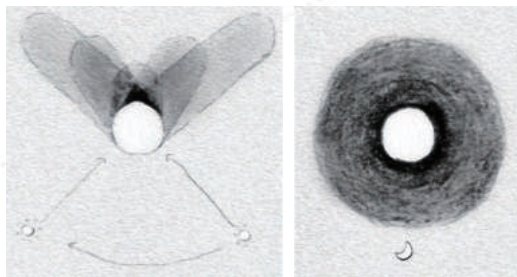
「光」に触れて触れられる



我々の日常は「光と触れ合う」ことで成り立っている。太陽の光を浴びることもあれば、時に光を求めて明るい場所へ向かう。そんな当たり前とも言える「光」との関係性を「触れて触れられる」関係として解釈した住宅を提案する。

-2-

『LightHouse』と2つの光



-昼-

-夜-

灯台守が暮らす家『LightHouse』を提案する。この家は昼は太陽光、夜は灯台光という異なる2つの光で照らされる。太陽光は季節や時間によって位置や光度を変え、その影もまた変化する。一方、灯台のそれは不変であり、灯台の足元には常に影が落ちる。『LightHouse』は、これら2つの光をもとに構成される。

-敷地-

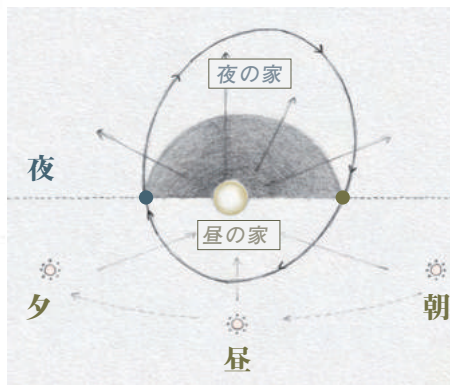
港湾都市の近郊に立つ灯台

-5- “ある灯台守の一日”

東を向いたベッドの上で眠りから覚めた。水平線から昇る太陽の光が目覚めの合図だ。今日は12月22日。一年で最も日照時間が少ない一日が始まる。私はベッドから下りると、右へ向かってびったり7歩分あるき、洗面台で顔を洗い、いつもの通り鏡を見ずに慣れた手つきで髭を剃った。湯を沸かしてコーヒーを入れるあいだ、冬の朝のキリッとした陽の光を左の頬に感じる。コーヒーを飲み干すと、日課である洗濯、掃除、軽い運動を手際よくこなしていく。部屋から部屋へと移動する際には、柔らかなカーブのついたテーブルをつたう。寒い冬の朝だからこそ、木の質感が温かく感じられる。その後昼食をとり、再びテーブルを伝ってサニタリーへと移動する。午前中はまだ暗かったが、太陽が南中を過ぎると柔らかな光が差し込むようになる。少し昼寝をし、古いジャズのレコードをかけ、昨日読みかけのまま伏せておいた小説の続きを読んだ。そうこうしていると、顔の正面に受けていた太陽の光が、頬を伝い右に動いたのを感じる。それは“仕事”の合図であり、毎日のことではあるが徐々に緊張感が高まっていく。壁伝いに6歩半、ドアを開けて点灯室に入る。右手を壁に這わせると、冷んやりとした鉄製の大きなレバーに触れる。大きな深呼吸をひとつしてから、重いレバーを勢いよく上げる。大きな音とともに東の間の静寂が訪れ、一筋の強い光が海に向かって放たれた。私は直接見ることはできないが、そのことが確かな感触として手に残る。再び大きく息を吐き、今度は左を向いて点灯室を後にする。廊下の先に落ちる光を頼りに、緩やかなスロープを下る。突き当たりで緩やかに曲がる壁の感触と、部屋に入ってくる微かな土の匂いを頼りに、外の空気を吸いに庭へでる。冷んやりとした潮風、湿気をふくんだ海の香り、遠くで鳴る汽笛の音を全身で感じ、海を行き交う船舶とその船乗りたちを想う。一日のうちでも大切な時間のひとつだ。しばらく物思いに耽け、ゆっくりと部屋へ戻る。いつもより少し早い夕食をつくって食べ、長めのお風呂に浸かり、あがってから暖炉に火を入れた。徐々に高まる熱は肌を、パチパチと鳴る音は耳を心地よく刺激し、それに混ざって波が岩礁にぶつかる音も聞こえる（船乗りたちは安全に航海しているだろうか）。そんな感触をしばらく楽しんでいると、次第に空気が冷え、音も小さくなり、一日が終わりに近づくのを感じる。火を消して壁伝いに廊下へと向かい、夕方とは反対に今度は緩やかに昇る感触を足の裏に感じながら歩を進める。廊下を昇りきると暗闇が一段と深くなったのがわかる。ここは家の最も暗い場所で、そこを左に折れると寝室にたどり着く。光と影に導かれるようにして、あるいは触覚、聴覚、嗅覚で直に家と触れ合うことによって、今日もまた平穏で刺激的な一日を過ごすことができた。明日からは日照時間が徐々に長くなることだろう。そんなことをぼんやりと考えながら、東を向いたベッドのうえで眠りについた。

-3-

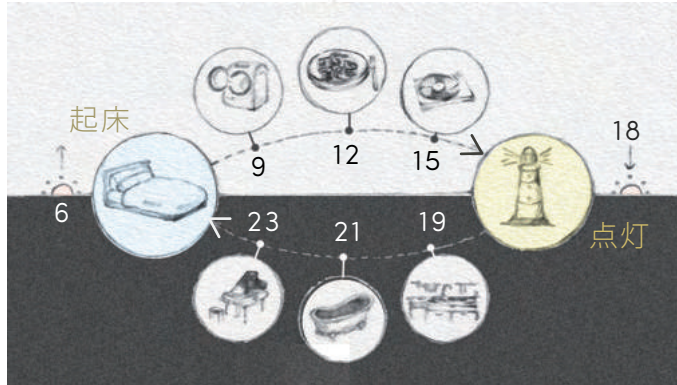
楕円平面と昼夜の家



太陽 / 灯台の光の方向性を考慮し、建築構成は灯台を焦点とした楕円平面とする。日中に太陽光を得る「昼の家」と夜に灯台光を得る「夜の家」の二つの家によって構成される。盲目の灯台守はこの二つの入れ替わり続ける光を辿り、二つの家を行き来することで生活を行う。

-4-

灯台守に触れる / 触れられる建築



建築が働きかける温度や匂い、材質感や形状などによって盲目の灯台守は自身の位置を認識し、誘導されることで機能間を渡り歩く。住宅の主要な機能は楕円軌道状に配置されており、彼は日の出から日の入りまでの時間を、家の南部分で過ごし、太陽の動きに合わせて光を辿りつつ、家の中を移動しながら食事や洗濯をする。日の入りの時間がくると、点灯室に向かい灯台に光を灯し、明るくなった北部分に移動する。軌道上を進むことで最終的に寝室へ到着し、彼は一日かけて楕円軌道状の家を一周する。

North PLAN

-NIGHT-

GL±0 1/20

299.462° 夏至

270.570° 春分・秋分

241.864° 冬至

South PLAN

-AM10:00-

N

0 1 2 5 (m)

断面

60.538° 夏至

89.672° 春分・秋分

118.134° 冬至

- 8. 点灯室
- 9. 廊下
- 10. 便所
- 11. 庭
- 12. 貯蔵庫
- 13. 台所
- 14. 食堂
- 15. 更衣室
- 16. 浴室
- 17. 演奏室
- 18. 居間
- 19. 暖炉
- 20. 倉庫
- 21. 便所
- 22. 廊下

SECTION